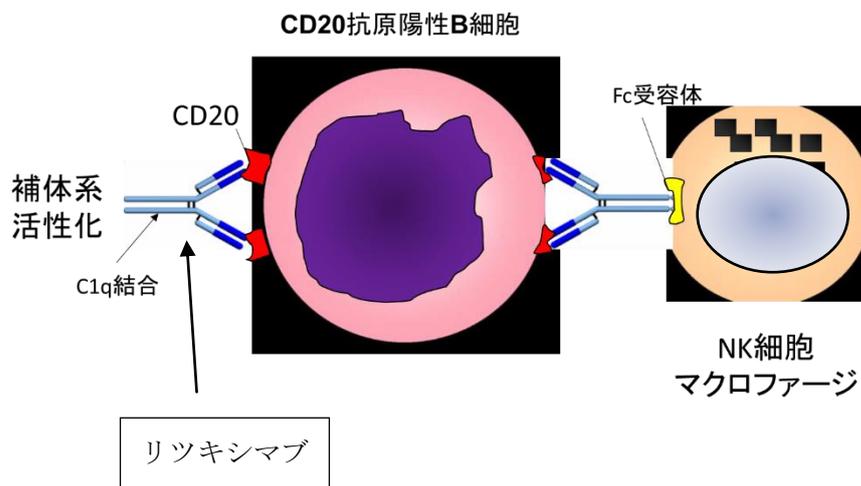


⑱リツキサン®はどんな薬？

リツキサン®は、悪性リンパ腫の治療をしている患者様では、よくご存じのお薬です。リツキサンは一般名で、リツキシマブといい、マウスの成分とヒトの成分でできた「抗CD20抗体」です。抗体とは、いわば体内で作られるミサイルのようなタンパク質で、外部から体内に侵入してきたバイ菌やウイルスを攻撃します。一般的に抗体は、標的とするもの（抗原、こうげん）を認識して、それに結合する能力がありますが、人工的に「CD20」と呼ばれる、Bリンパ球にしか見られないタンパク質を認識して結合するように作られています。いったんCD20に結合したリツキシマブは、生体内の免疫の力を借りて、結合した細胞を攻撃し、死滅させます。つまりリツキシマブはCD20を持つ細胞のみ攻撃し、CD20をもたない細胞には影響を与えません。B細胞性リンパ腫はたいていCD20を持っていますので、リツキシマブはリンパ腫細胞のみを攻撃して、正常の細胞には影響をあたえない、つまり副作用のほとんどない理想の薬なのです。



リツキシマブがCD20という細胞表面物質に結合すると、免疫担当細胞（補体：ほたい、NK細胞：えぬけーさいぼう、マクロファージ）を引き付けて免疫の力で標的細胞を攻撃します。CD20を表出しない細胞（皮膚や粘膜、肺、肝臓などの臓器の中にある細胞）は打撃をうけないので、副作用は少なくなります。

しかしリツキシマブ単独では、有効率（病変が半分以下に小さくなる割合）が約30%と低く、治癒も得られにくいことが分かっており、標準療法であるCHOP療法と併用して使われます。するとCHOP療法単独で使用した場合と比較して10-20%の上乗せ効果が期待できるのです。



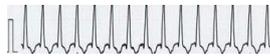
リツキシマブは上述のようにほとんど副作用がないのですが、唯一1回目の投与時だけ、「infusion reaction、インヒュージョン リアクション」と呼ばれる副作用が出ることがあります。これはリツキシマブが免疫の力を借りて標的細胞と反応するとき、身体の中で起こる強い炎症によると考えられています。震えとともに高熱が出て、動悸がして頻脈になり、血圧が高くなったり低くなったりします。たいていはいったんお薬をやめて、抗アレルギー剤を使用し、少量投与で再開すると、問題なく投与できますが、中止を余儀なくされることもあります。

Infusion reaction の症状

寒気・高熱



頻脈



咳嗽、息切れ



皮疹



リツキシマブ開始後1~2時間後が最も出やすいです。